



TITLE:

# 貨幣の本質と価値 - 中山教授の批判に答へて

AUTHOR(S):

岡橋, 保

---

CITATION:

岡橋, 保. 貨幣の本質と価値 - 中山教授の批判に答へて. 経済論叢 1938, 47(1): 136-142

ISSUE DATE:

1938-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131116>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第一號

昭和十三年七月一日發行

## 論叢

「むすび」の道と統營經濟……………經濟學博士 作田 莊一  
清算貿易制の諸形態……………經濟學博士 谷 口 吉彦

## 時論

戰時の農業政策……………經濟學博士 八木芳之助  
消費節約に就いて……………經濟學士 柴 田 敬

## 研究

ナチス革命の原理と價值の轉換……………經濟學士 中川與之助  
生命保險料の一考察……………經濟學士 近 藤 文二  
資本の流動化と再投資に就て……………經濟學士 有 井 治  
日本莊園の構造……………經濟學士 江 頭 恒治  
貿易理論について……………經濟學士 松 井 清

## 說苑

貨幣の本質と價值……………經濟學士 岡 橋 保  
間屋制工業の資本主義的性格……………經濟學士 堀 江 英一

## 附錄

彙報  
外國雜誌論題

(禁轉載)

## 説苑

### 貨幣の本質と價值

——中山教授の批判に答へて

岡 橋 保

嘗て私が「貨幣本質の諸問題」なる著書において、シユムベーター並びに中山伊知郎教授に對して呈示したる異見が、恩師高田博士の垂教に接するの機縁に恵まれ、<sup>1)</sup> いままた中山教授は、その「貨幣の本質とその價值」なる論文において、<sup>2)</sup> 高田博士への答辯とともに、わざわざ私見に對しても教示の勞をとられ、後進指導の熱意を示すことを吝まれなかつた。従つて私は、こゝに、その教示に従つて反省せる結果を率直に表明し、もつて教授の好意に酬ゆるところあらんとする。勿論、私はそのまへに、高田博士の高教に答へて謝意を表明すべきが本筋ではあるが、貨幣の生成に關する私見を展開したる後に譲ることによつて、却つて問題の解決に便宜なるを思ひ、これを他日に期したいと思つてゐる。

まづ中山教授の主張と私見との異同を明らかにする

ならば、——

貨幣の根本機能として交換手段機能を否定され、かくして貨幣をして貨幣たらしめるがための價值、すなはち貨幣の固有價值、従つて貨幣の價值の質的問題の究明への架橋をそこに見んとされる。この點私も全く教授の意圖に賛同するものである。

併しこの同じ目標への到達において採らるべき道程は、それぞれ異なる。すなはち、教授は限界效用理論あるひは一般均衡理論に據つて成就せんとされる。反之私は、むしろそこには目標への道の見出され難きを思ふ。従つてこれらの差異は、貨幣の根本機能として、教授は計算貨幣機能を主張されるが、私はむしろ價值の尺度機能をとることに聯繫をもつてゐる。あるひは教授が價值の尺度機能を捨て、計算貨幣としての機能を貨幣の第一機能とされる立場は、貨幣の價值の理論に於いて主觀的價值學說を採られること、必然の聯繫あるものと言へやう。

これに對し、私の結論はこうである。

1) 經濟論叢、第45卷、第4號。  
2) 經濟論叢、第46卷、第4,5號。

貨幣の根本機能は價值の尺度たる點にある。この立場に立つことによつて、はじめて、貨幣が貨幣たり得る所以の價值、すなはち固有價值が説明され得ると思ふ。併し交換手段機能をもつて根本機能となす見解にあつては、貨幣の固有價值の解明は不可能であり、従つて貨幣の價值の質的問題は看過されざるを得ない。而して限界效用理論または一般均衡理論にあつては、結局、價值の尺度をもつて貨幣の第一機能となす見解は許容されず、従つてまた貨幣の固有價值の解明は與へられないであらう。

私はすでに「シユムペーターの貨幣本質觀と貨幣數量説」において、大體、このやうな結論に到達した<sup>3)</sup>。その後、中山教授は同じくシユムペーターによつて、交換手段機能に對する計算貨幣機能の優位性を強調され、もつて材料價值に基づく貨幣の固有價值の究明への途を開拓せんとされた<sup>4)</sup>。併し私は教授の簡潔なる併し含蓄にとめる敘述の眞意を理解し得ず、無暴にも前掲のごとき結論を提示して御教示を仰いだのであ

#### 貨幣の本質と價值

つた<sup>5)</sup>。

この問題に就いての中山教授の御教示の要點は次のごとく要約することが出来ると思ふ。

貨幣の根本機能は計算貨幣たる點に存す。この計算貨幣機能は決して價值尺度を前提とせず、従つて「計算貨幣の機能そのものが必ずしもそれ自ら價值ある財を前提としない」<sup>6)</sup>。かくして貨幣の固有價值は單純に素材價值からではなく、「それはむしろ端的に貨幣の均衡表現の作用に關聯しての價值」、「價值關係」<sup>7)</sup>に依つて基礎づけ得るとされるものゝ如くである。そうしてこの價值をワルラスの謂はゆる「所望の現金 (encaisse) (denier)」の主觀價值的基礎づけによつて、解明せんとされる。併しそこにはたゞその意圖が表明されてゐるのみであつて、なにより具體的な展開がなされてゐるわけではない。しかもシユムペーターに在つても、ワルラスと同様の企圖のなされてゐたことに言及し、彼の數量説のうちに多くの貴重なる暗示の存することを教へられる<sup>8)</sup>。

3) 内外研究、第5卷、(昭和7年)。  
4) 中山教授、純粹經濟學、(昭和8年)。  
5) 拙著、貨幣本質の諸問題、(昭和11年)。  
6) 中山教授、貨幣の本質とその價值、經濟論叢、第46卷、第5號、47頁。  
7) 中山教授、前掲論文、50頁。  
8) 中山教授、前掲論文、53頁。

いまワルラスに就いてはこれを措くも、シムペーターに關して言へば、私の狭い知識から見て、彼においては結局、貨幣の固有價值の基礎づけが不可能であつたやうに思ふ。然るに中山教授は、反對に、シムペーターにおいてもその可能性の看取されることを説かれるが、その論據の詳細に就いては少しも明らかにしてをられない。ことに私が貨幣の固有價值は必ず素材價值でなければならぬと主張せるに對して、ならの詳説もなしに、たゞ不當なるを指摘してをられるに過ぎない。<sup>10)</sup> いまだ教授の積極的論據を窺ひ得ざるが故に、私は自己の主張の不當なる所以を理解するに苦しむものである。

さらに中山教授は私に斯く反批判される。すなはち、「氏(岡橋)の主張は要するに私見(中山教授の)が貨幣としての價值と貨幣が貨幣たり得る所以の價值との關係を無視するものであるとし、之を無視するが故に價值尺度の強調に於てシムペーターから一步を踏み出し乍ら、結局はシムペーターの指圖證券學說へ逆戻りしてゐるものであると斷定されるのである。……けれども……二つの貨幣の價值の關係が無視せられてゐるとは抑も何處から得られる論斷であらうか。

このことは前節第三段の問題群が私の貨幣觀に於いて如何に重要な地位を占めるかを看取せられる讀者に對しては、もはや何等の附言をも必要としない。……この場合岡橋教授をして右の如き論斷に到達せしめた唯一の理由は、貨幣の關係を保つところの價值を以て必ずしも貨幣の材料價值たることを必要としないと述べた私の一句にあるものゝごとくである。或ひは教授をして言はしむれば若しこれが證明せられないうならば結局に於いて貨幣の二つの價值の關係は解かれてゐないといふであらう。しかしこの點については既に前節の第二段に於いてふれたところであるから茲には繰返さない。簡単に言へば貨幣が計算貨幣を實現する限りに於いて關係すべき價值はむしろ一つの價值關係であつて決して單純なる計算貨幣の素材價值ではないのである」<sup>11)</sup>と。

私は決して、中山教授にあつては、貨幣の二つの價值の關係が「無視せられてゐる」とは言はない。むしろシムペーターの古い考へに従つて、この問題の解明への道を開拓せんとされしことに對し、絶大の賛意を表したのであつた。併しシムペーターにあつては、そのことが成就されてはをらず、事志しと相違してゐることを明らかにし、この同じ動向を辿らんとされし教授の意圖が少なくとも具體的な形においては表明さ

9) 中山教授、前掲論文、50—51頁。

10) 中山教授、前掲論文、47—48頁。

11) 中山教授、前掲論文、52—53頁。

れてゐないといふことを指摘したるに過ぎない。中山教授が貨幣の固有價值を基礎づけんとされる意圖を持つてをられたればこそ、私は教授の開拓の勞を高く評價することを忘れたかつたのである。併し教授の意圖の如何に拘らず、かゝる動向においては、遂に、その所期の目的の達せらるべくもなきことを表明したのである。いまや教授はこの點に關し、含蓄ある敘述をもつて示唆されるところあつたが、それはたゞ、「貨幣が計算貨幣を實現する限りに於いて關係すべき價值はむしろ一つの價值關係であつて決して單純なる計算貨幣の素材價值ではない」とされるのみであつて、教授の「問題に對する方向を指示する以上には出」てをられないのである。かくて私は、その論據の内容に就いては、遂に、これを讀み取ることが得なかつた。幸ひこの點さらに啓蒙の勞を吝みたまはざれば幸甚である。

中山教授は貨幣の價值の基礎づけといふ問題を「單純に素材價值との連絡と見」る私見に極力反對され、從つて教授にとつては、「ミーゼスのごとき基礎づけ

#### 貨幣の本質と價值

の仕方が主觀主義學說から期待し得る唯一の殘されたものとも考へられない」と述べて、ワルラス、シュムペーターにおいて既にその解決への道の開拓されてをつたことを繰返し強調されるのである。<sup>14)</sup>

勿論、ワルラスは「所望の現金」をもつて保有效用を唱へ、ミーゼス流の消費效用以外に限界效用理論のいま一つ他の適用範圍を見出してゐるがごとくである。<sup>15)</sup>

併しこのやうな概念規定の導入によつて到達し得るところは、一種の動機論であり、またミーゼスの數量說の主觀主義化と一脈相通するところあるやに考へられる。そうしてそこには更に、多くの問題の伏在せることが豫感される。併し私はワルラスに就いて發言權を持たない。たゞ教授のごとき、その人を得て、ワルラスのうちに埋れたまゝになつてゐる寶の吾々の手の届き得るところに持ち來たされることを待つことゝしやう。たゞ教授が、自己の見解のワルラスとの聯關を指示されるのみでは、教授の貴重なる示唆も、吾々にとつては、結局、「猫に小判」の憾みなしとしない。

12) 中山教授、前掲論文、51頁。

13) 中山教授、前掲論文、53—54頁。

14) 中山教授、前掲論文、56頁。

15) 安井琢麿氏、貨幣と經濟的均衡、經濟學論集、第8卷、第4號、69頁その他。

16) 拙稿、貨幣價值の歴史的連續性の構想の性格に就いて、内外研究、第10卷、第3—6號、220頁參照。

近頃、栗村氏も盛んにワルラスを振り廻される。私にとつてはまことに迷惑なことである。ことにシユムペーターを論ずる場合にも、ワルラスの理解を缺いては「幣駝を針の穴に通すことよりも尙ほ困難である」<sup>17)</sup>と強調されるにいたつては、杲然たらざるを得ない。それは、價值の尺度としての貨幣の必然を説けるシユムペーターが、いつの間にかこれを放棄して、交換手段としての貨幣をのみ論ずるにいたれる所以が、シユムペーター自からによつて何にら説かれるところなきを指摘せる私に對して、栗村氏はワルラスの影響をもつて簡単に片付けてをられるからである。勿論、シユムペーターの見解のうちにはワルラスよりの影響の跡いちじるしきものがあらう。しかし單にワルラスを引合に出すだけで、問題は解決されるわけではない。しかも栗村氏のこの批判が、私の書物「貨幣本質の諸問題」を讀んだうへでの話しなのだから、私は面喰はざるを得ない。なにらかの成心あつての言葉（敢て誹謗とは言はない）として見ればいざ知らず、そうでない純然たる

學問的な友情から出たものとすれば、栗村氏から斯かる奇襲をうけやうとは孫子の兵法書にも見出し難き新手であつた。たゞ見解上の相違があるのであれば、これは餘儀なきことである。もしもそうであれば、堂と自己の所信を呈示して啓蒙の勞を吝むなかれ。

元來私は、貨幣の機能論と貨幣の價值論との聯關性を強調するものである。貨幣の根本機能が貨幣の價值の問題と無關係に論ぜられては、その貨幣理論の體系の十全性、完足性は破壊されざるを得ないと考へる。

このことは又、一般價值論との聯關の問題にも通じてゐることは言ふまでもない。従つて、まづ栗村氏の貨幣價值論に就いて論じたる私は、この視角からして氏の貨幣の根本機能論に對して一つの問題を提起したわけである。<sup>18)</sup>一般價值論と貨幣價值論との聯關についてしきりに強調される栗村氏が、もつと手近かな貨幣價值論と貨幣の根本機能論との内的聯繫を顧みやうとしないのはなぜか？氏の貨幣必然論、従つて貨幣の根本機能觀そのものに就いては、もとより私に異論はあ

17) 栗村氏、貨幣の根本機能に關して高田博士に教を乞ふ、九州帝大經濟學研究、第7卷、第4號、157頁以下。

18) 拙稿、貨幣價值論の動態論的性格觀の批判、内外研究、第10卷、第2號、及び貨幣價值の歴史的連續性の構想の性格に就いて、内外研究、第10卷、第3-6號參照。

る。併しこれはまた論すべき機會が他にもあらう。といふのは、その異論は、一つに、貨幣の機能論と價值論とのこの内的聯繫の看過に基づけるものと言ふことが出来るからである。それで問題は、なによりも先づ、この聯繫を考へることである。併し、價格の一般的表現手段が貨幣價值論と一般價值論とを聯繫せしめ得るものとすれば、それは價值の尺度機能を前提とせざる限りは不可能である。その點、シユムペーターは徹底してゐると思ふ。併し何故に價值尺度機能をもつて終始し得なかつたかは、彼の方法的な缺陷のうちにその説明を求めねばならないであらう。こゝにこそシユムペーターが交換手段をもつて貨幣の根本機能となすにいたりし根據があるのであつて、何にもワルラスを引合に出すには當るまい。<sup>19)</sup>

栗村氏のワルラス論を俟つまでもなく、シユムペーターは、遂に、價值尺度機能を棄て、交換手段機能をと、従つて指圖證券學說を樹立せざるを得ざるにいたつたことは、シユムペーターがワルラスよりの影

#### 貨幣の本質と價值

響のあつたかいなかに拘らず、彼の理論體系を貫く方法論的な制約に因由することは明らかである。私はワルラスに依據することなくして、栗村氏が讀んだ筈の私の著書の中で、このことを強調しておいた。それをいままさら、氏からワルラスを持ち出して教へられやうとは、全く皮肉だ！ 私は敢て栗村氏の暴言をこゝに詳細に引用することを控へておく。たゞ一言だけをつけ加へておく。お互はいまだ未熟な一介の學徒にすぎない。勉強はこれからだ。切磋琢磨もつて鞭撻し合ふことだ。内容のなき空疎なる言葉で高踏的に出ることはやめやう。宣戰布告はいつでも出来る！

さらに議論を中山教授に戻す。教授の計算貨幣の必然論に就いて卒直に言ふことが許されるならば、それは、教授の意圖を裏切るものではなからうか。高田博士も述べておられるが如く、ワルラスの一般均衡方程式の表明するところは、たゞ、「一般均衡が成立してゐる場合に於ける各經濟數量間の關係の記述である」<sup>20)</sup>。

19) 拙著、貨幣本質の諸問題、第2章參照。

20) 高田博士、貨幣の本質について、經濟論叢、第46卷、第4號、35頁。



計算貨幣が素材價值に關係を持たざる限り、貨幣の交換手段機能に對するその優位性は論證され難いであらう。これ私が計算貨幣に代つて價值尺度をもつて貨幣の根本機能となし、このことを貨幣の必然性の論理を通じて明らかにせんとする所以である。

私の意圖は、全く、中山教授の意圖するところと同じであると思ふ。たゞ教授の辿られる道程と私のそれとが異なつてゐるだけである。自己の不敏にも願みず再び問題の所在を明らかにして教へを乞ふ。たゞ教授を煩はすことなきやをおそる。敢て啓蒙の勞を吝まれずば幸ひである。

——一三・五・三——